

二〇〇八年度「後藤新平の会」シンポジウム

国家を超える

【21世紀と後藤新平 Part 4】

苅部直＋新保祐司＋梯久美子＋
赤坂憲雄＋渡辺利夫（司会）御厨貴

◎開催の挨拶

◎問題提起

苅部 直 闘争と調和——後藤新平の国家観と

国際秩序観

新保祐司 活ける『西国立志編』

梯久美子 “地べたを見る人”の国際性

赤坂憲雄 東北から東アジアへ

渡辺利夫 “開発学の父”としての後藤新平



◎ディスカッション

主権国家システムと自治——後藤の二面性

徳の世界にこだわる後藤新平

後藤的なものが利用された時代、だが

植民地へ向かう力学と東北の救済

文装的武備の思想

大連の都市建設と満鉄調査部

後藤と内村の宗教的信念

後藤さんが横にいたら——

*文中肩書は当時

「開発学の父」としての後藤新平

拓殖大学学長 渡辺利夫

■台湾拓殖の人材養成と拓殖大学

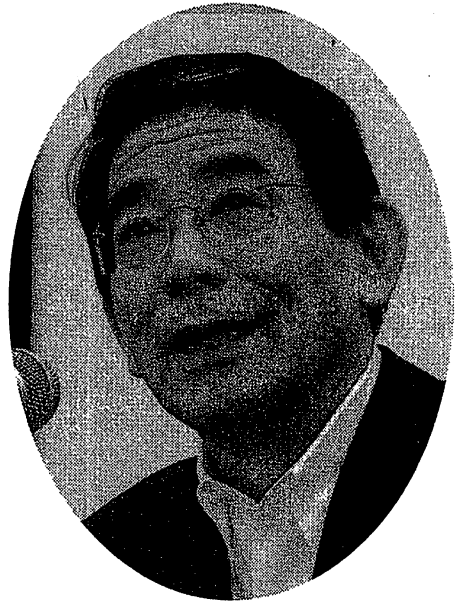
渡辺でございます。私のような専門家ならざる人間がなぜお招きを受けたか。その理由は判然としませんが、恐らくこういうことだろうという想像を申し上げることで、話を切り出してみたいと思います。

私は現在拓殖大学の学長を務めておりますけれども、拓殖大学の拓殖というのは、実は台湾拓殖のことでございます。日清戦争で日本が勝利して、清国から割譲を受けた日本初めての海外領土です。それまでに異民族統治をまるでやったことのない日本にとりまして、台湾統治がいかに難行であったかは想像できるだろうと思います。何よりも台湾の開発と経営に当たる人

材、これが全くいなかったわけですから。この台湾拓殖のための若い人材養成の場として、第二代の台湾総督である桂太郎公によって明治三十三年に設立されたのが台湾協会学校でありました。これが実は拓殖大学の前身でございます。台湾協会学校は大正七年に創立二〇周年を迎えました。これを機に、後藤新平さんが第三代の学長に就任したという次第です。この後藤の尽力により、台湾協会学校は拓殖大学に昇格できたということですから。後藤新平さんは昭和四年の四月に逝去されますけれども、この約一〇年間、拓殖大学の発展に寄与してくれました。新平さんの推挙により台湾総督府の糖務局長に就任したのが新渡戸稲造さんですけれども、この新渡戸も帰国後に拓殖大学の学監となる。学長みたいなものですが、そういう経緯もございます。このような次第で、現在の学長である私に一言しゃべらせてやろうというお心配りが、藤原社長や御厨先生の中にあつて、今日私はお招きを受けたのではないかと感謝しております。しかし、いま申し上げたようなストーリーは、御厨先生の『後藤新平大全』の中にもほとんど記録がないので、今後改訂のときにはぜひ入れていただければ大変ありがたいと思っています。

■後藤の生物学的植民地論と今日の開発経済学

さて、私自身の研究分野は開発経済学、デベロップメントエコノミクス、一言で申し上げれば開発途上国の開発の政策的な処



渡辺利夫氏

例えば、何といっても、彼が民政長官として台湾開発にどんな思想と構想でのぞんだのか。さらに言えば初代の満鉄総裁として、この後藤の仕事ぶりはどんなのであったかということが、どうしても関心にならざるを得ないわけでありませう。

後藤新平の開発思想は、よく「生物学的植民地論」だと表現されます。そう言っているのではないかと、私も思います。後藤の言っていることを私なりにパラフレーズすれば、個々の生物の生育にはそれぞれ固有の生態的条件が必要であるから、一国の生物をそのまま他国に移植しようとしてもうまくいくはずがないと。つまり移植のためには、その種のことを徹底的に調べ上げ、その地の生態に見合うよう改良を加えなければならぬ。つまり内地日本の慣行、組織、制度を台湾のそれに適用す

方せんを描こうという、まことに厄介なテーマでございます。

このテーマを追究するために、この三〇年ばかりアジアの地を這うような仕事を続けてまいりました。そういう私にとりま

るように、工夫しながらかの地の経営がなされるべきだと。概略こういう主張が後藤の生物学的植民地論のエッセンスなのではないかと思えます。

ところで、これは開発経済学の世界においては、創成以来、一貫して最も重要な問題として提起されているものであります。そしてその答えが、なお十分にまだわかっていないというテーマでもあります。後発国の開発というのは、要するに先発国を成功に導いた技術をいかに後発国に移転、定着させるかにあるわけです。この場合の技術は産業技術はもとより、その他制度的な技術、組織的な技術、そういうハード、ソフト両面の技術が含まれているわけです。しかし先進国でいかに成功をおさめた技術であっても、これを後発国に移転していっても、そううまく簡単に定着するというわけにはまいりません。移転定着のためには、受け入れ国の条件に適合したものととして先発国の技術を改変、再編していかなければならない。この改変、再編には率直に言って、途方にくれるほどの膨大な努力が必要です。

■緑の革命と「適正技術移転論」

私が勉強したその一例を申し上げますと、一九七〇年代の初めからアジアを覆った米の高収量品種の普及拡大運動があります。これはグリーンレボリューション、緑の革命と言われております。もしこの革命がなかったならば、アジアのほとんどの

国は、今の北朝鮮のような絶望的な飢餓がまん延していたであろうと想像できるわけです。

この緑の革命は、日本の米であるジャポニカ種とアジアの米であるインディカ種を交配することによってできた、いわばハイブリッド米のことです。このハイブリッド米の生成史を私は調べたことがあるんです。マニラの南方、今ですと車で一時間半ぐらい行きますと、フィリピン大学の農学部がありまして、その中にロックフェラーとフォード両財団のお金でつくられた I R R I (International Rice Research Institute)、国際稲作研究所があります。そこで先の交配を、無限の順列組み合わせでやっています。そうやってやっと実験農場段階でいいものができたわけですけれども、これを技術者が意気込んで他の国に持って行って、実際のほ場で育成してみる。そうすると、やはりうまくいかない。土壌が違う、日照時間が違う、あるいは病虫害が出てくるという惨憺たる結果になって、また実験農場に戻ってきて改良を加える。今度はいいだろうと持っていくと、また別の問題が出てくる。引き返して、またやる。まさに実験農場と実際のほ場との間で、無限のフィードバックを一〇数年繰り返して、やっとなんとかそれぞれの地域に根づくようなハイブリッド米ができました。これで今のアジアの米の単収、単位面積当たり収量が革命的に上昇し、今日のアジアの人口増大にもかかわらず、米供給量はほとんど問題がないレベルにまで達したというわけです。

この産業技術、あるいは組織的な技術、制度的な技術、これを受け入れ国にいかに対応したものにするか。開発学では「適正技術移転論」と言われて、これが今なお我々の分野の最も重中心的なテーマであり続けております。

しかしよく考えてみると、これは後藤新平の生物学的植民地論が既に想定していたテーマでして、私がこの問題提起を「開発学」の父としての後藤新平」と名付けたのは、まさにその理由からです。

台湾の治安制度で保甲制度とか、アヘン吸飲の漸減政策とか、上下水道の整備、縦貫鉄道を始めとするさまざまなインフラ、こういった後藤が台湾でやったことのすべてが徹底的な調査の上になされた、いわば現地適応型の大事業であったということ、これが後藤の後藤たるゆえんであるうと思われまます。後藤新平が既に台湾統治時代に、開発学の中心的テーマを、自分が解決すべき課題として設定し、しかも実際の行動に打って出たというところに、彼の偉大さを感じているわけです。

そういう意味で、生物学的植民地論と彼が試みた大事業を、開発学の観点からどうやって、もう一度これを明示的なメッセージとして提出できるかどうか。これが開発学を勉強している人間の、これからの一つのテーマになるのではないかと思えます。御清聴ありがとうございました。

御厨 ありがとうございます。